

1 部門目標

- ・検査技術と精度の向上
- ・スタッフ連携、モダリティ連携の強化

2 業務体制・スタッフ

通常日勤業務、日当直業務（1名）、準夜・深夜勤業務（1名）と3種類の業務体制になっています。

一般撮影室2室・CT室1室・X線テレビ室2室・乳房撮影室・MRI検査室1室・核医学検査室・ポータブル撮影装置3台・手術室イメージ2台、リニアック1台、治療用CTシミュレータ1台を、常勤の放射線技師14名、非常勤放射線技師1名、受付業務4名（非常勤）、総勢19名のスタッフで対応しています。

医療機器については、今年度はX線テレビ装置および心血管用バイプレーン装置の更新が行われました。X線テレビでは広い視野と汎用性の高さを活かした柔軟な検査・処置への対応が実現され、血管撮影室では高感度かつ高分解能の装置により、安全確実な治療が実践できるようになりました。今後も安全安心な医療を提供するための体制を整えるために計画的に機器の更新を予定しています。

3 業務実績

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	率(29→30)
CT	7,809	7,946	8,464	6.5%
MRI	2,228	1,988	2,488	25.2%
核医学検査	395	353	335	-5.1%
血管造影	398	356	446	24.2%
乳房撮影	1,854	1,501	1,426	-5.0%
一般撮影 他	26,985	30,783	31,156	1.2%
合計	39,669	42,927	44,311	3.2%

※H29年より乳房撮影の集計算出方法が件数から人数に変わりました。

4 1年間の総括

H30年度の検査状況は、総検査人数としては44,311人で、前年度に比べ1,384人増(3.2%)と、若干の増加が見られました。

各モダリティ別の検査数として、CT：8,464人、MRI：2,488人、乳房撮影：1,426人、一般撮影他：31,156人は、H29年度に比較し、それぞれ518人増、500人増、75人減、373人増でした。MRIは機器更新によって対応可能な検査が増え、それに伴い検査件数が増加したと考えられます。乳房撮影は、昨年度から集計方法の変更を行い、件数から人数に変更となっていますが、検査数としては頭打ちと思われる状況です。全体として、若干の件数の増加は見られる中、モダリティを有効に活用する診療科の縮小に起因して、核医学検査が353人→335人と減少が見られます。核医学検査は全国的に減少傾向が強く、特

に当院では循環器関連の減少が多く見られます。血管造影は 356 人→446 人と持ち直してきており、カテーテル治療のバックアップ体制の変化に伴った減少は相変わらず見られるものの、診断カテーテルの増加がその減少分を補っており、血管造影全体としては増加傾向が見られます。

大きな事業として、X線テレビ装置の更新、および先に掲げた心血管撮影装置のバージョンアップがありました。X線テレビ装置は視野サイズが約 1.3 倍にのフルサイズになることで、細部にわたって病変検出感度の高い撮像が可能となりました。心血管撮影装置では、FPD（平面検出器）の仕様が直接変換方式から間接変換方式に変わり、また、視野サイズが 9 インチから 12 インチへ若干拡大したこと、高感度化と温度管理が容易になったことで、冠状動脈治療において被検者および術者の被曝低減を実現しています。今年度は機器のバージョンアップ作業のために検査可能日数が制限されていたにもかかわらず、昨年度より件数増加が見られていることから、この更新作業が有意義であった事が伺えます。

5 今後の目標

現在の画像は、質的診断を目的とする情報源としての価値が強く求められています。要求される画像にも変化が見られ、特に CT・MRI・核医学などの後処理を伴う検査について顕著に現れています。造影 CT の比率増加とそれに伴う三次元画像構築、MR 検査では特殊撮影法の追加、CT や MRI 画像と核医学画像の融合表示処理など、形態と機能の同時評価が求められ、2つのモダリティが一つの寝台で構成されている SPECT/CT や PET/CT、PET/MR なども機器の更新時には考慮する必要もあります。H25 年度の CT の更新以降、装置の処理能力が大きく改善され、また画像処理ワークステーションもソフトウェアの更新を行う度に高機能となっています。MRI については高磁場の機種へ更新したことで、診療局の特殊撮影の要望に対しても十分応えることが可能となり、さらに検査効率の改善により、待ち時間の短縮など、患者満足度アップにも貢献できると考えております。

放射線科全体の検査数はほぼ横ばいの状況が続いておりますが、逆に各モダリティを学修する機会は増えているため、各スタッフのモダリティへの習熟に力を入れた人員配置を考え、特定スタッフへの負担を軽減しつつ、経験の浅いスタッフを順次レベルアップさせる機会を多く設けたいと考えています。目標である、検査技術と精度の向上のために勉強会や研究会等への参加だけでなく、自ら研究を行うことで知識を深め、自施設が持つ機器の能力を最大限使い切るための努力を惜しまずに勤めたいと思います。

また、被ばく低減を図ることも重要な課題と考えております。医療安全の観点からも、現行装置の撮影手順や撮影条件の見直し等、線量管理の知識と重要性を学び、放射線に関する専門科として業務に当たっていきたいと思います。